

北陸から発信する ICAN —なくしまっし 核兵器

International Campaign to Abolish Nuclear Weapons

「第19回つどい」に多数のご参加を

第19回「核戦争に反対し、核廃絶を求める医師・医学者のつどい」が開催されるにあたり、白崎良明実行委員長が参加の訴えを発表し、全国からの参加をよびかけている。(関連記事2面)



白崎良明実行委員長

第19回「核戦争に反対し、核廃絶を求める医師・医学者のつどい」を本年11月22日(土)23日(日)石川県金沢市で開催します。メインテーマは「北陸から発信する ICAN (International Campaign to Abolish Nuclear Weapons) —なくしまっし 核兵器」としました。昨年の20周年記念「つどい」でのティルマン・ラフ氏の提案を受け、核兵器廃絶条約の実現をめざす IPPNW の国際キャンペーンを日本の反核・平和の草の根運動に広め、奔流にしたいという願いがこめられています。今年の「つどい」では特別講演、シンポジウムとともに展示ブースを設けて各地の運動を交流します。医学生・研修医の独自企画を設けて若い世代に運動を継承していくことも計画しています。さらに反核・平和を愛する市民の皆様と共同で市民公開講演を行います。

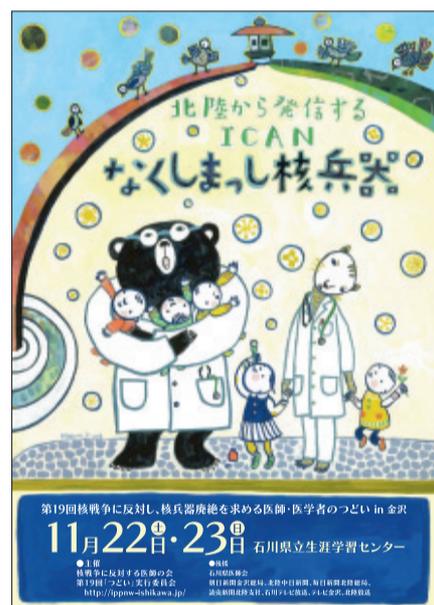
反核医師の会 ニュース

第39号

2008年7月31日

核戦争に反対する医師の会事務局
〒920-0902 石川県金沢市尾張町2-8-23 太陽生命金沢ビル8階 石川県保険医協会内
電話 076-222-5373 FAX 076-231-5156
e-mail ippnw@ishikawa.jp
http://ipnw-kanazawa.jp/

核戦争に反対する医師の会



「第19回つどい」への参加をよびかけるチラシ

◇会場 石川県立生涯学習センター
3階 大会議室

11月22日(土)
13:30～ 市民公開講演
「平和な世界をめざして—市民ができること」
講師 堤 未果 (著述家・ジャーナリスト)
15:30～ 特別講演
「医師として原爆症認定集団訴訟を支援してきた」
講師 郷地秀夫 (核戦争を防止する兵庫県医師の会運営委員)
17:00～ 全体会 (基調報告、IPPNWインド大会の報告等)
19:00～ レセプション/金沢エクセルホテル東急

11月23日(日)
10:00～ 市民公開シンポジウム
「核兵器廃絶をめざして—私たちができること」
報告者:
梅林宏道 (NPO法人ピースデポ特別顧問)
鎌仲ひとみ (映像作家)
西本多美子 (石川県原爆被災者友の会事務局長)
金森俊朗 (いしかわ県民教育文化センター所長)
12:40～ オプション企画「兼六園平和散策と昼食会」
案内人: 下郷 稔 (元兼六園管理事務所長)



◇募金振込先
りそな銀行 新都心営業部 普通 1557502
「反核医師 医学者の集い」
郵便振替 00170-7-56764
「反核医師・医学者のつどい」

◇問い合わせ先
核戦争に反対する医師の会 (略称: 反核医師の会)
第19回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい実行委員会
〒920-0902 石川県金沢市尾張町2-8-23 太陽生命金沢ビル8階 石川県保険医協会内
TEL:076-222-5373 FAX:076-231-5156
http://ipnw-ishikawa.jp/

NW会長は「Enough Blood Shed」(邦訳本:『平和へのアクション101+』)かもがわ出版)で核兵器を廃絶し、戦争のない世界をつくるのが出来ることを説き、市民運動がその役割を果たしてきていると私たちに確信を与えています。「つどい」で核兵器廃絶をめざした草の根運動に学び、さらなる確信を得る運動の広がりをつくろうではありませんか。

金沢は「小京都」とも呼ばれ、町並みに歴史と文化を残している加賀百万石の城下町です。兼六園、金沢城、武家屋敷や、いま話題の金沢21世紀美術館にも「つどい」会場から歩いて数分で行けます。この季節はカニ漁も解禁され、寒ブリなどの味覚も堪能できます。日頃、臨床・研究に多忙のなかを反核・平和運動に取り組んでおられるみなさまに少し、骨休めになる企画も用意しておりますので、多数ご参加いただきますようお願いいたします。

こんにちは。石川県の金沢市にある城北病院2年目研修医の呉林です。あつという間に自分の研修も2年目になり、今は産婦人科、小児科といういろいろな科で勉強しているような毎日です。子どもはいいですね。自分には将来やりたいことはありますが、なんだか明るい未来みたいなものが、たくさんありそうな子どもをみていると、それを助ける産婦人科や小児科がとて

もいい科やなっていると思います。命を奪う行為は、その人の輝いている未来を奪う行為です。核兵器は、戦争をしたくとも思っていない、子どもや、その子のお母さん達も犠牲者にし、たくさ

ん歴史や街並みや、時間ですら止めてしまうような力を持ちます。脅威や、不安や、敵意を感じることもなく過ごせることができたなら、それらを持たない子どもたちが輝いている世界にならないかなんて思います。もともと平和について特別な関心が無くても、特別なことを言ったり、特別な何かをしたりしなくても、私はいいと思います。もし何か、自分のどこかに触れる部分があれば、ぜひ金沢に来てみて下さい。私は、少し足が軽かったのか、インドでのIPPNW大会に参加することができ、金沢でもアシユフォードさんの講演を聞くことやお話しすることもできました。要は、何かを感じることで、一歩だけ少し動いてみることにじやないかと思えます。独特の雰囲気と街並みと、海の幸と一緒に金沢でお待ちしています。また続きはその時話しましょう。



城北病院研修医 呉林秀崇

若手医師、
医学生のみなさん
金沢で
お待ちしております

さて、今年の11月22、23日に、石川県金沢市で「第19回核戦争に反対し、核廃絶を求める医師・医学者のつどい」が開催されます。核戦争に反対するというのはどういふことなのか、自分なりにそんなことを考えてみました。私は、あまり普段そんなことを考える方ではありません。人権とか平和とかを意識している方が人を殺したり、殺されたりすることは好きではありませぬ。できるなら、たたくさんの人が、当たり前前の生活を、自然に、幸せに過ごしたらいと、幸せに思っています。命を救うことを仕事とす。またその仕事を自分の夢とするような医師や医学生の方々は、私と同じような—それ以上の思いを持つた人は多いのではないかと思っています。命を奪う行為は、その人の輝いている未来を奪う行為です。核兵器は、戦争をしたくとも思っていない、子どもや、その子のお母さん達も犠牲者にし、たくさ

原爆症集団訴訟

国はただちに訴訟の全面的解決を

原爆症認定集団訴訟で、5月末の仙台・大阪高裁の判決は、新基準で「積極的認定」の対象となっていない疾病の原告をふくめ全員勝訴し、国は上告を断念した。続く6月の長崎地裁判決でも、新基準で対象にされていない肝機能障害の原告などについても認定すべきだと判断を下した。4月以降、「新しい審査方針」によって、原告を含む400人以上が認定されているが、国・厚労省はなお裁判で争い続けようとしている。反核医師の会では、被爆者全員の救済と被爆者行政の抜本改定を求めている。

仙台高裁判決 認定却下は不法と国を断罪

埼玉・大場敏明



5月28日、仙台高裁は、

原爆症認定仙台集団訴訟に、原告2名に対して、一審に続き、厚生労働大臣の認定申請の却下処分を取り消す判決を下した。国の6連敗を受けて、今年4月の新制度スタート後初の司法判断であり、6高裁で争われていた上告訴訟のトッパッターの判決であり、今後の集団訴訟の行く末を指し示すものとして注目された。



長崎地裁判決をうけ、原告や支援者ら約20人が訴訟の全面解決や原爆症認定基準の見直しを求め、長崎市の平和祈念像前で座り込みを続けた。

さらに国に対して認定基準を根本的に改めるよう、再度強く求める判決を下した。国は裁判で原告の傷病が原爆放射線による可能性自体を否定してきた。大阪高裁の意見陳述所の冒頭に「原告らは、広島、長崎の原爆放射線による被曝をほとんどしておりません。それである以上、一審原告らの申請疾病等に放射線起因性が認められる余地はありません」と記し、論述してきた。

判決は「新しい審査の基準」にもとづき、放射線起因性について明確に認めるとともに、最大の争点であった「要医療性」も認めた重要な内容である。従来の国の審査では、術後5年を経過し再発しない場合、癌は治癒したとして申請を却下してきた。しかし仙台高裁判決では、手術後も後遺症に対する治療や、再発の有無の観察のための定期検査などが実施されている場合は、要治療の状態が継続しているとの司法判断が行われ、国の審査を批判する判決を下したものである。

原爆症訴訟大阪高裁判決で原告全員勝訴

兵庫・武村義人

5月30日、控訴審となっていた大阪高裁は原告9人全員を原爆症と認定した。

「新基準ではいきなり遠距離被爆者や入市被爆者のがんと『原爆症』として認定する。そうであるなら、これまでの原告への謝罪があり、なぜ基準を変更したのか説明があつてしかるべきであろう。当然のことながら、控訴の取り下げを先にするべきであろう」としてその新基準の中では積極的に認める疾患として5つの疾患が挙げられているが、そのなかに放射線白血内障、放射線起因性の心筋梗塞がある。とくに放射線起因性の心筋梗塞とは何か、具体的な説明、理論的根拠がまったくない。さらにこれまで認められてきた疾患で新基準にないものもある。そしてその2ヵ月後あの新基準さえも見直せという大阪高裁の判決がなされたのである。これまでの論争において医師には3つの立場があるという。臨床医の立場、医学者の立場、行政に押し切られる医学者の立場である。さいごに郷地医師の談話「被爆者を前にしたとき、私は一人の医者―臨床医の顔で接したい。それはともに健康を考え、守る主治医としての医師の立場である」としての医師の立場である。「この判決の結果多くの原爆症認定申請がされるであろう。放射線白血内障、放射線起因性の心筋梗塞の診断名を書いていただける医師が一人でも多く現れることを願ってやまない」



証言に立った郷地医師は怒りを込めこのように語る

第19回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい in 金沢 2008
講演者・パネリスト紹介

11月22日(土)
13:30〜市民公開講演
「平和な世界をめざして―市民ができること」

堤 未果 (著作家・ジャーナリスト)



11月23日(日)
10:00〜市民公開シンポジウム
「核兵器廃絶をめざして―私たちができること」

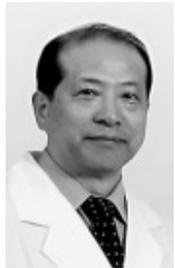
梅林宏道 (NPO法人ピースデポ特別顧問)



東京生まれ。国連、アムネスティ・インターナショナルニューヨーク支局員を経て、米国野村證券に勤務中に9・11に遭遇。現在はニューヨーク東京間を往来しながら執筆、講演活動を行う。著書に「グラウンド・ゼロがくれた希望」(ポプラ社)、「報道が教えてくれないアメリカ弱者革命―なぜあの国にまだ希望があるのか」(海鳴社)、「2006年日本ジャーナリスト会議黒田清新人賞受賞」、「ルポ貧困大国アメリカ」(岩波新書) (第56回日本エッセイスト・クラブ賞受賞) など。

15:30〜特別講演
「医師として原爆症認定集団訴訟を支援して」

郷地秀夫 (核戦争を防止する兵庫原爆症の会 運営委員)



広島県生まれ。精神科、神経内科、リハビリテーション科、一般内科、緩和医療等に携わりながら、被爆者医療に30年余り取り組んできた。約250人の被爆者の主治医。これまで兵庫県下1500人の被爆者と関わってきた。著書に、被爆者との実相と生き様を描き、原爆症の実体を明らかにして国の認定基準を告発した「原爆症―罪なき人の灯を継いで」(かもがわ出版)がある。

西本多美子 (石川県原爆被災者友の会事務局長)



4歳のとき広島で被爆。自らの体験だけでなく、多くの被爆者証言を受け継ぎながら、県内に留まらず国内外で講演、被爆証言を行うなど、被爆の実相を伝える活動を続ける。核兵器の廃絶と原爆被災者への国家補償を

求めて国に働きかける一方、県内被爆者の原爆症認定支援にも力を注ぐ。



鎌仲ひとみ (映像作家)

大学卒業と同時にドキュメンタリーの現場へ。主に医療・環境問題をテーマとしたノンフィクション番組の制作に取り組んでいる。映画「ヒバクチャー―世界の終わりに」(六ヶ所村ラプソディー)などは我々のよく知るところである。共著に「内部被曝の脅威―原爆から劣化ウランまで」(ちくま新書) などがある。

金森俊朗 (いしかわ県民教育文化センター所長)



NHK番組「涙と笑いのハッピークラス」4年1組命の授業」で全国的に有名になった金森学級の担任。昨年3月に小学校教諭を退職した後も、命の大切さを一貫して訴え続けている。「子どもは学び合っている」と育つ―金森学級38年の教え(角川書店)など数々の実践的教育を描いた著書がある。

◆参加費	
医師・歯科医師・医学者	5,000円
医療関係者	2,000円
医学生	1,000円
・レセプション参加費:	
一般	8,000円
医学生	4,000円
・オプション企画参加費(先着30名)	3,000円(入園料・昼食代込)

◆後援団体
石川県医師会 朝日新聞金沢総局
北陸中日新聞 毎日新聞北陸総局
読売新聞北陸支社 石川テレビ放送
テレビ金沢 北陸放送

好評です！ 『平和へのアクション101+2』

アシュフォードさん講演会に のべ2000人が参加

反核医師の会は、20周年記念事業として、「平和へのアクション101+2」を発行した。5月には、著者の元IPPNNW共同会長のメアリーウィン・アシュフォード氏が来日し、全国10箇所で開催し、全体では2000人が参加した。翻訳作業にかかわった方や読んだ方からの感想が寄せられたので紹介する。

「この世界で、実現させたいと願う変化に、私たちが自身ならなければならぬ」というマハトマ・ガンジーの有名な言葉が私は好きです。これは『平和へのアクション101+2』第Ⅱ部の「変化の一部になろう」という章にも掲載されています。

この章に書かれている「世界に望む変化のために、自らが変化と共に生きる」ことは、決して簡単なことではないと感じます。

また、本書の「あなた自身が経験したことが一番説得力がある」との言葉に、私はとても勇気をいただきました。被ばく者の方々の証言や学習を通して核兵器がもたらす惨状を知った私にできるのは、戦争反対・核兵器反対の想いを育んでいく

歩みを止めずに継続していくことが大切

こと、そして少しずつでも周りの人へ経験や実感を伝えていくことだという、シンプルだけれど大切なことに気がつき、原点に戻る思いがしました。常に高い意識を持って活動に参加することは困難なことです。私自身も例外ではありません。先が見えず、確かな変化を感じられない



長崎大学医学部6年 領家 由希

ことも多くあります。それでも、絶望するのではなく、少しずつでも歩みを止めずに継続していくことが何より大切なのだと感じています。目立たないような小さな変化にも目を向け、そこに微かでも希望の光を見出していきたく思います。私がなぜ冒頭のガンジーの言葉に惹かれるのかと考えると、それは紛れもなく、私自身がめざす生き方そのものだからです。私は、自身への期待を含めて、変化とともに生きていきたいと、今、強く思っています。

武器を抱えた 動く原発はいらない

～灼熱のなか原子力空母配備反対に3万人～



「神奈川基地レポート」を陽よけにする参加者

7月13日午後、真夏の太陽が照りつける横須賀ヴェルニイ公園で、「原子力空母ジョージ・ワシントン配備に反対する横須賀集会」が開かれました。首都圏をはじめ全国各地から3万人を超える市民が「米軍再編強化反対」の声を米軍や海上自衛隊のイージス艦や護衛艦が所狭しと埠頭を埋めた横須賀港と米兵や海上自衛隊員が闊歩する横須賀の街にとどろかせました。

司令官の赴任式で発表され、参加者の新たな怒りを巻き起こしました。集会では、岩国や沖縄はじめ全国各地に米軍基地がある地域からのたたくいと広がり、報告もあり、再編計画がひとつでも狂えば、アメリカの戦略を崩すことができることに確信を持って連帯してたたかうことを決議しました。

原発を推進力にしたジョージ・ワシントンが、弾薬と航空機燃料を満載し、赴任途上の太平洋上での火災原因も明らかにされないまま9月末には配備されることが集会前日、第7艦隊新

平和へのアクション101+2 戦争やテロのない世界の表現に向けて



メアリーウィン・アシュフォード
Mary-Wein Ashford
松井和夫 監訳
戦争やテロのない世界の表現に向けて

かもめ出版

「平和へのアクション101+2」表紙

「ボランティアだからといって、質に妥協しない」これが皆の共通の思いでした。著者の思いを最大限伝えながらも、日本語として自然なものにするのが目標でした。そのために原稿はすべて5～6人が目を通し、繰り返しチェックしました。このプロセスを知ったアシュフォード先生は「それだけのコストを払える出版社なんてどこにもありません！」と驚いて、ボランティアだからこそできた仕事を心から祝福してくれました。

まさに「平和へのアクション」が実を結んだのは、幸運というより奇跡です。企画は反核医師の会、翻訳はプロから学生までの57人、編集はライターを中心とした精鋭チーム、監修は平和運動に長く携わってきた松井和夫医師。“無敵の集団”が約1年間、おびたしい時間と労力を注ぎ込みました。しかも誰ひとり、流した汗を自慢するどころか、いとも謙虚に「私の人生の転機となりそうです。素晴らしい経験でした」と楽しそうに振り返るのです。

「平和へのアクション101+2」の 翻訳を終えて

大阪女学院大学准教授 友野 百枝



PANW（核戦争に反対する医師の会）では、友野百枝は「松井君をそそのかした悪い女」という噂らしいですが…本当です。原著をしばらく眺めた後、「素晴らしい本ですね」と電話で語り合いました。「訳しましょう」との私の誘いに松井先生はなかなか「うん」とは仰いませんでした。さすが責任感の強い日本男児です。私の声が悪魔の囁きに聞こえたそうです。でもこの本には「やらなければ」と思わせる“何か”がありました。メアリーウィン・アシュフォードという人間の平和への情熱に突き動かされたのだと思います。

今年4月、出版。5月にアシュフォード先生が来日し、3週間の滞在中、ほとんど連日各地で行われた講演は感激、感涙の連続でした。聴衆は1,000人を超え、「市民が本気で動いたら世の中を変えられる」という熱いメッセージが深く胸に刻まれました。皆の心に灯った炎は、周囲の人を照らし続けると確信しています。

(写真＝前列右が筆者。後列左はアシュフォード氏、前列左は松井氏)



集会で名古屋高裁「イラク派兵違憲判決」の意義を報告する池住義憲氏

各地の反核医師の会から

北海道の会が九条の会と合同講演会

核戦争に反対する北海道医師・歯科医師の会は、6月28日、札幌市内で第20回総会を開きました。洞爺湖サミットを目前にして、「核戦争は最大の環境破壊。会結成20周年を来年に控えて、今こそ核兵器廃絶を」と全道の医師等に呼びかける特別決議を採択しました。

その後、医療九条の会・北海道と共催で、東京大学大学院教授である高橋哲哉さんを迎えて「憲法について、いま考えたいこと」と題する公開講演会を行い、約150人が参加しました。以下、講演の要旨です。

9条をめぐる状況では、新聞の世論調査や名古屋高裁判決などある種の追い風が吹いていることは確かだが、自民党は改憲をあきらめたわけではない。

憲法前文は、「平和的生存権」を「等しく、恐怖と欠乏から免れ」た状態だとし、戦争がないだけでなく、飢餓や貧困からも自由でなければならぬと言っている。



記念講演する高橋哲哉氏
6月28日、札幌市

記念講演後、会場からの質問に答える高橋哲哉氏
(中央) 6月28日、札幌市



「希望は戦争」という論文を書いた32歳のフリーターである赤木智弘氏は、「今の『平和』が続けば不平等が一生続くだけであり、閉塞状況を打破する可能性のひとつが戦争だ。現状の平和が、他の誰かにとってはまったく平和ではないという現実を改革し、正しい平和を達成する」べきと主張しているがこれは正論ではないか。

現状の平和が皆の平和ではない現実（それは憲法9条が空洞化されてきた結果）を変えていくことが私たちの課題である。

(常任世話人、北海道反核医師・歯科医師の会事務局 塩川哲男)

反核医師の会第27回総会 (兵庫)

「慰安婦」問題 女子学生が報告

核戦争を防止する兵庫県医師の会は、7月19日に協会会議室で、第27回総会を開催し18人が参加。総会議事では、07年度活動報告と08年度活動方針が承認され、役員提案では口分田勝代表、林祐介運営委員長らが再任された。

記念講演「慰安婦」と心はひとつ—女子学生のレポート—では、神戸女学院大学の石川康宏教授が講演し、同大学石川ゼミナールの山口真実さん、塗田麻美さんが報告した。



記念講演する石川康宏・神戸女学院大学教授

石川先生は、改憲の動きや政治の転換を視野に入れ、「慰安婦」問題の背景を解説。04年以降、ゼミ生

とともに韓国の「ナヌムの家」と日本軍「慰安婦」歴史館を訪問し、毎年ゼミ生の編集で本を刊行してきた経験も語った。

大学4年生の山口さんと塗田さんは、スライドで大学ゼミでの学習の様子を伝え、日本人の一人として「慰安婦」への加害を明らかにし、その責任を語るため、各地で報告会を行っていることなどを紹介。「慰安婦」問題を通じて、社会や政治の問題に関心を持つようになったので、同じような若い世代や大人にも伝えていきたい」とした。



講演した石川康宏教授と報告者の山口真実さん、塗田麻美さん

書評

「大量虐殺の社会史」

松村高夫・矢野久 編著

虐殺という言葉は聴くだけでおどましく、その詳細からは目をそむけたくなるものである。しかし、20世紀は戦争と虐殺の世紀であった。この本は20世紀に生じた虐殺の中から重要な事例を選び、その虐殺が生じた原因を歴史的脈絡の中で捉え、虐殺の経過を可能な限り再現し、その結果と影響を明らかにすることによって、20世紀の虐殺の特質を解明しその全体史を構築しようとするものである。

多くの大量虐殺は国家間の戦争行為とそれに連動して生じたものであった。そこでは国家権力が戦争行為にかかわり虐殺行為の主体として登場し、国家権力をめぐって殺戮行為が展開されたこともあった。20世紀のなかでも冷戦終結後に生じた多くの虐殺は『民族浄化』の名の元に行われた。民族対立、宗教が社会体制よりも重要な紛争の原因になっている。国家としての統一性が喪失したところでは政府機構、国際法が有効に機能しなくなっている。

21世紀になつて戦争と虐殺を阻止する展望を持ちその方策を試行し始めたところで9・11事件が起き、アメリカによるアフガニスタンにつづくイラクに対する戦争が世界中の反戦の声を無視して強行された。戦争と虐殺を阻止する展望は打ち砕かれ、世界には暗雲がちこめていく。

20世紀の歴史には、列強の中でもとりわけアメリカが少なからず虐殺を直接的、間接的に背後で扇動しただけでなく、ひとたび虐殺が生じたときには常に意図的に虐殺を抑制する政策は採らなかった。例を挙げると第二次大戦後アメリカはナチ

ドイツのホロコーストを批判したけれども大量虐殺は許してきた。また1976年当時、カンボジアで行われた大量虐殺の事実をつかんでいながらポルポト政権【クメール・ルージュ】を支持したことなどである。著者は自国の利害を優先し超大国としての責任、役割を果たさなければいけりか、イラクやアフガニスタンで自ら虐殺を行ったアメリカを痛烈に非難している。

第11章では「現代医療を考える会」の山口研一郎氏は医学が戦争と虐殺にどのように関与してきたかを731部隊の例などを挙げながら分析し、現代未来の医療においても先端医療の名の下で人権侵害、医学犯罪の懸念を指摘、医学、医療の根底に存在する生命倫理の新たな確立の重要性を指摘している。

21世紀に戦争と虐殺をなくすために、どのような思想を構築し、いかなる行動をとるべきなのか、そのために20世紀の虐殺の歴史から何を学ぶことができるのか、これが本書の目的である。

(大阪 武田勝文)



ミネルヴァ書房
A5判・442頁
定価4,725円 (本体4,500円)
(発行2007年12月)

2008年度会費納入と募金のおねがい

会員各位

日頃のご奮闘に心から敬意を表します。

さて、「反核医師の会」では今年も第19回つどい開催のほか、20周年記念事業の準備を進めています。つきましては会の財政基盤の安定のためにも、2008年度の会費納入と募金へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、すでに納入済みの場合等、行き違いがあった場合は、ご容赦下さい。

- ◇個人会員 (医師・歯科医師、医学者) 10,000円
- ◇賛助会員 (個人会員以外の個人、医学生、団体など) 一口 1,000円